



日伊文化交流協会 監修

『現代イタリア情報館』

(泉文社)

今日イタリアに関するガイドブックや書籍がたくさん出版されています。なかでも本書はアイウエオ順に地名、文化、言葉などあらゆるジャンルをキーワード形式でイタリアについて知ることができます。フェラーリ、セリエA、グッチといった皆さんにおなじみの言葉も数多く収録されています。また執筆陣による現地での経験を踏まえたコラムも多く載っていて、旅行の際にもかなり役立つ1冊です。本書を読めばかなりの「イタリア通」になるかも？ 293.7-Gend (H.M.)



岡田臣弘 著

『21世紀の中国像』

(有斐閣)

本書では大衆の流行語を通じて中国社会の基盤を活写し、政治面では、権力構造が今なお払拭できない封建遺制の現実を洞察。経済の面では、国有企業と金融及び農業改革、そして安定成長が課題であること。また外交では、江沢民政権下のアジア権益保全外交へと変転した歩みを検証。日中交流関係については、先ず日中両国の違いの認識が友好と協力のベースであるとしています。

21世紀中国の全体像を理解するための良き概説書と言えるでしょう。

302.22-Oka (T.K.)

マーク・ピーターセン 著

『英語で発見した日本の文学』

(光文社)

日本語の文章とそれを英訳した文章とを比べると、ニュアンスにズレを感じることはよくあることだと思います。異なった文化の言葉を翻訳するには困難を伴う場合があります。

本書では、日本の小説や俳句とその英訳とでの読者が受ける感動の違い、日本文の美しさに対する魅力などが綴られています。英語と日本語の表現法の違いがよくわかり、お勧めの一冊です。

910.26-Pet (S.I.)



田所清克 著

『ブラジル学への誘い』

その民族と文化の原点を求めて』

(世界思想社)

たくさんの農業移民を乗せた笠戸丸がサントスの港に着いてから約100年、世界最大の日系社会を抱えながら、一般の日本人がブラジルに対して抱くイメージは、依然としてコーヒーの国、カーニヴァルの国です。寛容に日本移民を受け入れてきた極めて親日的なこの国を、もっと理解・認識するべきなのに。

本書は、ブラジル文学の翻訳やブラジル文学事典の編纂などを手がけてきた著者が、これまで発表してきた論文やエッセイから厳選し、集成した「ブラジル学」の入門書です。

262-Tad (Y.N.)